

Hiroshi HARA*: A new species of *Allium* from
Idzu Peninsula, Central Japan

原 寛*: 伊豆産アサツキ類の一新種

Allium idzuense Hara, sp. nov. (§ Rhizirideum) (Fig. 1)

Bulbus ovoideus 10-20 mm longus 8-12 mm crassus; tunicus membranaceus laevis, exterior saepe rubro-purpurascens non fibrillosus, radicibus filiformibus ca. 1 mm crassis. Pseudocaulis 2.5-7 cm altus 3-5 mm crassus 2-4-foliatus. Folia congesta lineari-cylindrica teretia fistulosa 7-18 cm longa 1.5-4 mm crassa viridia glaucescentia, vaginis albo-membranaceis. Scapus e basi pseudocaulis separatus, erectus 12-20 cm altus teres 2-3 mm crassus efoliatus. Umbella 2.5-3 cm in diametro 10-25-flora; spatha vulgo ovata ca. 1 cm longa albo-membranacea. Pedicelli 5-12 mm longi ascendentes. Flores albi campanulati 7-9 mm longi. Tepala ovato-oblonga apice breviter acuta basi paullo saccata 3-3.5 mm lata. Stamina tepalis breviora; filamenta simplicia ca. 5 mm longa, inferne gradatim dilatata, per 1.5 mm cum basi tepali connata, edenticulata; antherae oblongae ca. 1.5 mm longae. Ovarium subglobosum 2-2.5 mm longum; stylus subulatus 3.5-4 mm longus.

Nom. Jap. Idzu-asatsuki (nom. nov.).

Hab. Japonia. Honshu: in rima rupium ad littus Koiso, Suzaki, Peninsula Idzu (Imperator Augustissimus Hirohito, no. 2181, Jul. 19, 1973, fl.—typus in TI); ad littus Maruyama, Suzaki (Imperator Augustissimus Hirohito, Jul. 19, 1973).

This new species is allied to *Allium Schoenoprasum* L., but is clearly distinguished from the latter by leafless scape which is quite separated from a tuft of leaves, looser umbels, whitish flowers, and less pointed tepals. Its somatic chromosome number was proved to be $2n=16$ by Dr. Sachiko Kurosawa.

I wish to express my sincere thanks to the members of Biological Laboratory of Imperial Household for giving me an opportunity to study this interesting material.

* Department of Botany, University Museum, University of Tokyo, Hongo, Tokyo. 東京大学総合研究資料館植物部門.

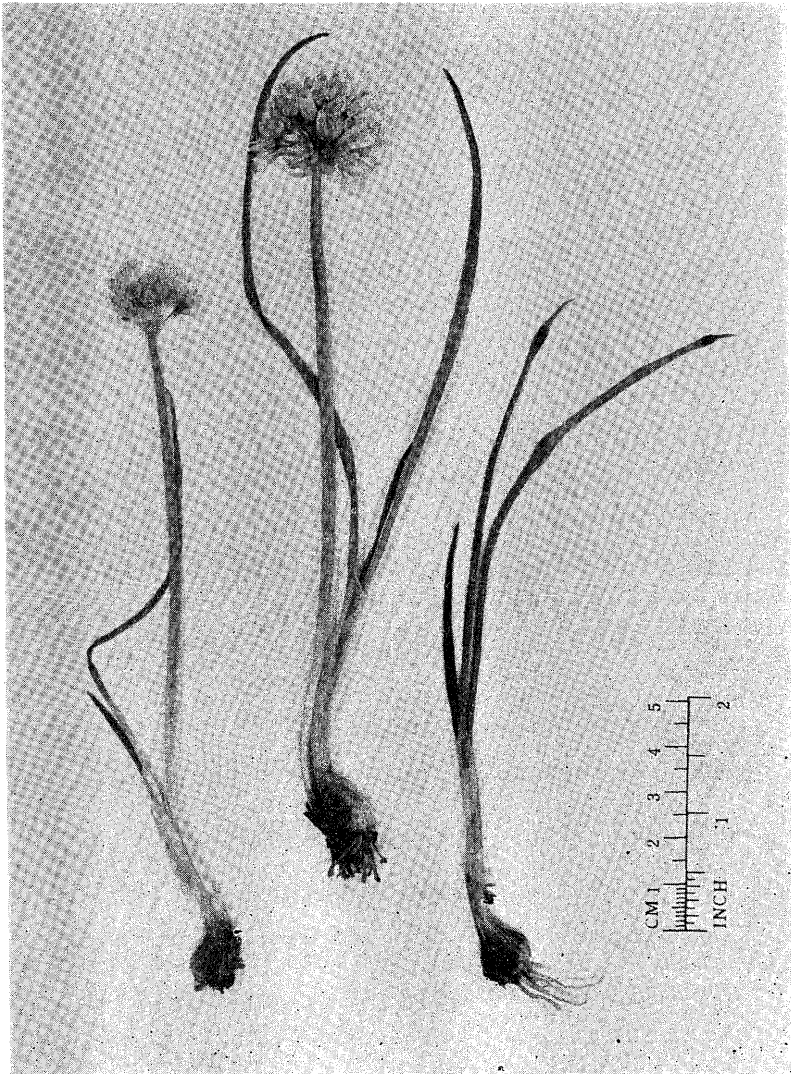


Fig. 1. *Allium idzuense* Hara (イズアサツキ).

* * * *

伊豆半島南端に近い下田，須崎海岸の岩隙に生えているアサツキに似た珍品を天皇陛下が御発見になった。鱗茎は平滑で葉は円柱形中空，雄蕊は花被片より短かく，花

糸に歯牙のない点などはアサツキに似ている。しかし花茎は葉束と基部から離れていて花数が少く、花は白っぽく、花被片はより短瀾で先端は短かく尖るのでアサツキとはっきり区別される。その染色体数は $2n=16$ であることが黒沢幸子博士によって確認された。新種と考えられるので **イズアサツキ** と名付けて発表する。本植物を研究する機会を与えて下さった生物学御研究所の方々に深謝する。

○南九州産タヌキノショクダイ属 2 種 (新 敏夫) Toshio SHIN: Two species of the genus *Gladiocharis* (Burmanniaceae) from southern Kyushu

タヌキノショクダイ属 (*Gladiocharis*) はヒナノジャクジョウ科 (Burmanniaceae) の帯白色の腐生植物で Brazil の Rio de Janeiro で唯一度一ヶ所で発見された植物について *Gladiocharis macahensis* として発表された一属一種の植物であった。

昭和 18 年 6 月 21 日、阿部近一氏が徳島県那賀郡大龍寺山麓の龍の岩屋で陸産貝採集中、同属のもの 1 個発見され、そのスケッチが阿波の自然 1 巻 1 号にのせられたのが同属のものが日本に知られた最初であった。しかし第二次世界大戦の最中であったため標本は失われてしまった。

昭和 25 年 7 月中旬に篠原勇氏が徳島県那賀郡沢谷村小灰の石灰岩地で化石採集中、多数採集されたものについて赤沢時之氏が *Gladiocharis abei* として正常な発表を本誌 25 巻になされ、本属 2 種目で日本特産のタヌキノショクダイが出現し本邦フロラに一大光彩をそえた。しかしその後わが国の他の地方に同種の発見の報は聞いていない。

一昨年以來、南九州に本属のものと思われる 2 種が出現したので、その生育地の生態環境等について連報し、同じような条件の西南日本にはまだまだこの仲間の珍種の出現が期待されるので同好の士に探索をお願いする次第である。

1. タヌキノショクダイ宮崎県に発見さる。1971 年 7 月 4 日、花房憲正氏が宮崎県都城市御池、霧島国有林第 23 林班 (海拔約 300 m) で陸産貝採集中 シーイヌノキ林中で落葉をかきわけている時に発見し、宮崎大学農学部 平田正一教授に同定を求め、タヌキノショクダイと同定を受けた。更に 1972 年 7 月 2 日現地を調査して約 4 アールの範囲に 3 ヶ所 17 本が落葉に埋れて自生しているのを確認し、更に 14~15 本の幼植物を菌根上に確認した。徳島県の産地がいづれも石灰岩地であるのに対し、本地域は火山岩地域で現地は西方に面し 14~16° の傾斜した斜面で、イヌノキが最も多く、ナラガシワ、ウラジログシ、シキミ、ツガ、サカキ、カエデ等の林で全く落葉にうもれて生えていて地上に姿を現していない。土壤条件は地表より約 1 cm 落葉が堆積し、その下約 3 cm は落葉がかなり分解が進み、その下は黒ボクからなる。

1972 年 7 月 2 日 13 時 30 分の測定では自生地の湿度 93~94%、照度 200 lux であった。花期は 6 月下旬から 7 月中旬までのようで、現地の状況からみて広葉樹の落葉のかなり腐植分解の進んだところに自生するように思われる。標本は液浸にしたもの